

趙貴花『移動する人びとの教育と言語
—中国朝鮮族に関するエスノグラフィー—』三元社、2016年

*Education and Language of Migrants:
An Ethnography of Korean Chinese, Written by Cho Kika*

山脇 千賀子*
Chikako Yamawaki

本書構成

- 序章 グローバル時代の朝鮮族の移動と言語教育
- 第Ⅰ部 中国東北部における朝鮮族学校の二言語教育
 - 第1章 中国における朝鮮族学校の二言語教育の実態とその変容
—延吉市とハルビン市の事例—
- 第Ⅱ部 朝鮮族の中国内における移動と言語意識の変化
 - 第2章 北京の「韓国城」(コリアンタウン)
—改革開放が生み出した新しい都市コミュニティー—
 - 第3章 北京へ移動した朝鮮族の言語意識と子どもの教育
—中国語、英語の重視と「民族語」の維持をめぐる—
- 第Ⅲ部 朝鮮族の国際移動とアイデンティティの変容
 - 第4章 高学歴者が「帰郷」するとき
—韓国在住の朝鮮族のアイデンティティの揺らぎをめぐる—
 - 第5章 ソウルのガリボン「同胞タウン」
—朝鮮族労働者と韓国人市民団体が共同で創りあげた街—
 - 第6章 高学歴朝鮮族の先を見つめる子育てとハイブリッド・アイデンティティ
- 終章 移動からみる朝鮮族のアイデンティティと教育戦略

I. はじめに

本書のテーマである「移動する人びとの教育と言語」は、グローバル時代といわれる二一世紀を生きる人々にとって、まさにホットなテーマに見えるだろう。日に日に私たちの生活は、安価で手軽な移動手段によるモビリティを前提としたものになっている。イギリスの社会学者ジョ

* 文教大学国際学部教授、Professor, Faculty of International Studies, Bunkyo University, E-mail:chica@shonan.bunkyo.ac.jp

ン・アーリが『社会を越える社会学』で論じているように、それは、近代以降の国民国家体制を前提とした私たちがイメージする社会を根本的に変貌させている。国民国家体制は国民を基本的に定住者とみなして設計されており、常態的に国境を越えて「移動する人々」の存在はあくまでも例外的な扱いをされてきた。しかし、世界が今、人々のモビリティを前提とする時代に突入しているとしたら、国家と言語・教育の関係性は大きな変動期に入っていると考えざるを得ないだろう。

このようなグローバル時代における教育と言語のあり方をめぐる議論は、非常に遅まきながら日本政府も対応を迫られてきた。2018年度から段階的に実施される日本の義務教育レベルでの英語教育をめぐる改革および2020年度から実施されるという大学入試改革は、日本が国家として教育と言語の問題にどのように対応していくつもりなのかを示す一例となっているといえるだろう。

ただ、世界レベルで見ると、日本政府の反応はいわば「ガラパゴス状況」にある。1990年代後半からEU・欧州評議会は、「移動する人々の教育と言語」というテーマに学術的にも本格的に取り組んで、実際の政策的指針も含めて理念を練り上げてきた¹。2000年よりOECD（経済協力開発機構）教育部門が3年毎に行っている国際「学力」調査（PISA：Programme for International Student Assessment）も、「移動する人々」の子どもが社会参加に充分なりテラシーを身に付けるために国を挙げた体系的・包括的な言語教育が必要であることをデータに基づいて明らかにして、各国政府への教育政策改善のための提言を行ってきた（OECD編著2006＝2007）。

こうした世界状況の中、21世紀の日本を含む東北アジアを縦横に移動している中国朝鮮族がどのような教育・言語環境におかれてきて、それがどのように変化してきているのか。さらには、中国朝鮮族の中でも中国語・朝鮮／韓国語・日本語を駆使しながら移動する高学歴者にとっての子どもへの教育方針とエスニック・アイデンティティのゆくえに関して、本書は私たちに様々な知的関心を引き起こす問題提起をしている。

II. 中国朝鮮族の概況をめぐって：使用言語に注目して

そもそも中国朝鮮族とは、どのような人々を指すのか。本書によると、その起源は、19世紀以降、朝鮮半島から数次にわたり中国へ移住した朝鮮人およびその子孫であり、中国国籍を有し、中国の戸籍に「朝鮮族」として登録されている「少数民族」である（P.49）。中国への移動時期に

¹ 欧州レベルでどのような言語教育を目指すのかを明確にする指針が欧州評議会言語政策部（Council of Europe, Language Policy Division）によって2001年に発表されている。「ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Language: Learning, Teaching, Assessment）（Council of Europe 2001-2002）である。この指針に基づいた具体的な言語教育ガイドが、*Guide for the development of language education*, (Council of Europe 2002-2003)であり、さらに、改定が重ねられた最終版が、*From linguistic diversity to plurilingual education: Guide for the development of language education policies in Europe* (Council of Europe 2007a, b) である。

これらによれば、欧州評議会の言語教育政策における五つの理念として、複言語主義・言語の多様性・相互理解・民主的な市民性・社会的結束の促進が掲げられている。そして、言語教育・学習が当該社会における市民性教育という社会構築ヴィジョンと共に方向づけられることにより有効性をもつという主張がされている（Council of Europe 2007b:10）。端的に言うならば「共に生きるための方法（a way of living together）」としての複言語主義と複言語教育が追求されている（Council of Europe 2007b:18）つまり、すべての多様なバックグラウンドをもつ人々を社会に包摂するためには、「市民」という概念についての人々の意識を変革するとともに、「言語」に対する意識にも革命的な認識転換が必要とされているというマニフェストとなっている。

ついて、大雑把な時期区分をすると、以下の三つに分かれるという。①越境潜入り期 1860～1904年、②自由移民期 1905～1930年、③強制集団移民期 1931～45年。そして、1949年に中華人民共和国の成立によって、朝鮮族として中国籍が与えられた。朝鮮族を含む55の少数民族はその独自の文化尊重のために、言語を継承する民族学校設立による二言語教育が可能になった。つまり、民族的アイデンティティと中国人としてのナショナル・アイデンティティの共存が認められる形で民族学校が存続してきたのである。

2000年中国人口統計によると、朝鮮族人口は192万3842人で、うち約120万人が東北3省（黒龍江省・吉林省・遼寧省）と内モンゴル地域に集中している（pp.14-16）。吉林省には延辺朝鮮族自治州があり、総人口208万人の約40%を朝鮮族が占めている。延辺自治州における朝鮮族は日常的に朝鮮語を使用する環境にあるのに対して、それ以外の地域における朝鮮族の言語環境は漢語の強い圧力にさらされている（本田2012：30）

周知のように、東北3省は旧「満州国」領土と重なる地域であり、朝鮮半島も1910年から1945年まで大日本帝国の支配下にあったことを考えると、中国朝鮮族の起源には近代東北アジアの歴史が深く関わっていることが分かる。現在の延辺朝鮮族自治州への隣接する地域からの朝鮮族の移動が歴史的に古く、「満州国」建国に伴う日本本土や朝鮮半島からの100万人移民計画（1936年）によって、現在の黒龍江省や遼寧省へ、主に人口圧力の大きかった朝鮮半島南部（慶尚北道・慶尚南道・全羅道）からの集団入植地がつけられ、同地域の漢民族とはちがって水稲耕作を生業とすることが民族的特徴として認識されるようになったという（本田2012：25-26）。1945年の「満州国」崩壊時、国内には110万人の朝鮮人が居住していたと推定され、そのうち約三分の二が残留したとされる（同上：27）。

こうした事情を背景に、本書では詳しく論じられていないが、中国朝鮮族は中国の日本語教育界でユニークな役割を果たすことになった。中華人民共和国の成立に伴って朝鮮族が少数民族としての地位を認められたと既述したが、1966年からの文革時代には朝鮮語を含む多くの外国語が「適性言語」と解釈されたため、民族学校でも朝鮮語教育が停止される状況が繰り返された。1976年に文革が終了し、1978年ごろに始まった大学統一試験の外国語受験科目として漢族の学校では「英語」が選択される中、朝鮮族の子どもにとっては受験を勝ち抜くために「日本語」が有利になると考えられ、「朝鮮族による朝鮮族のための日本語教育」が意図的に選択されたという。その要因としては、朝鮮語と日本語との言語的類似性の高さのためだけでなく、朝鮮族には「満州国」時代を経験した日本語を教えることのできる人材が存在したことが挙げられる（本田2012：134-5）。この結果、1990年時点での中国における日本語学習者24万9,000人のうち約三分割が朝鮮族だった（同上：1）。朝鮮族は中国総人口比では0.002%に満たない規模であることを考慮するならば、日本語と朝鮮族の関係性の特異さが際立つだろう。

このように中国朝鮮族が歴史に翻弄されるかたちで身に付けざるを得なかった言語能力は、東北アジアの政治的・経済的勢力関係の変化の中で、様々な意味付与をされてきた。それは、朝鮮族の母語の位置づけにも影響を及ぼしている。

中国の大学において朝鮮語学科が創設されたのは1949年であり、具体的には北京大、延辺大、中央民族大、洛陽外国語大の4校で、基本的には朝鮮族を対象とした「民族教育」の一貫としての位置づけであった（P.111）。朝鮮語教育に関しては、従来北朝鮮との関係が深く、教科書でも北朝鮮の文学作品などが使用されてきた。ところが、1992年に中国と韓国の間で国交が結ばれると、復旦大学、山東大学に韓国語学科が創設されたのに始まり、2008年には中国全土の約80校で韓国語学科が開設され、北京大でも2009年には韓国語学部を設置している（P.111）。これは、グローバル市場における韓国経済の成長に伴った韓国語の「地位向上」を象徴している。

同時に、1980年代からの改革開放政策によって、中国内陸部から東部沿岸地域への人口移動が急激に増加したが、朝鮮族の特に高学歴者はこの流れにのって経済発展の著しい都市部・沿岸部へと移住を始めた。比較的閉鎖的な民族的コミュニティに自足していた時代は確実に過去のものとなり、中国における共通語である中国語をしっかりと身に付けることが社会的上昇のために必要であることが強く意識されることになった（P.50－51）。

また、並行して韓国企業の中国への進出が始まり、韓国語と中国語でのコミュニケーションができる朝鮮族の人材への需要は急激に高まった。朝鮮族に求められるのは、「民族の継承言語」としての朝鮮語ではなく、「就労のためのコミュニケーション言語」としての韓国語に変化してきたのだ。

韓国法務部の統計によれば、2012年現在、約47万人の中国朝鮮族が韓国在住とされている（P.143）。朝鮮族全体の約25%にあたる。80年代後半以降の韓国の急激な経済成長期から、非公式なかたちでの朝鮮族の韓国への出稼ぎ現象がみられたが、92年の中韓国交樹立以降はより広範な就労目的で中国から韓国へ移住することができるようになった。2005年調査での朝鮮族の中国国内での移動先としては、山東省（青島含む）約18万人、首都圏（北京・天津を含む）約17万人、華東（上海を含む）約8万5千人、華南（広州を含む）約6万人、西部（西安・成都を含む）約2万人とされている（pp.15－6）。これらを合計すると、中国国内で移動した朝鮮族の総数は、約51万5千人となり、朝鮮族全体の約28%にあたる。さらには、2010年現在、日本に居住している中国朝鮮族は約6~7万人と推計されるという（P.192）。

つまり、中国朝鮮族の約55%が故郷を離れて日中韓に移動して生活している状況が、わずか20年余りの期間に急速に進展したことが分かる。その他、英語圏を中心にした諸外国へも移住しており、エスニック集団メンバーの過半数が移動しながら生活を成り立たせている現状は、中国朝鮮族が今後もエスニック集団として存続するかどうかを危ぶませるほどのものになっているといえるだろう。世界的にみても稀で興味深いケースであるこうした事態の背景には、朝鮮族の教育と言語に対する態度が深く関わっている、というのが本書の見立てかもしれない。

Ⅲ. 21世紀のハイブリッド・コリアンタウンをめぐって

本書のテーマは、終章のタイトルにあるように、「移動からみる朝鮮族のアイデンティティと教育戦略」である。朝鮮族の「大移動時代」に入った21世紀において、朝鮮族としてのアイデンティティが実際に表現される現場としての教育戦略を分析しようとした試みといえよう。親は子どもにどの言語を習得させようとしているのか。それはどのようなビジョンに基づいているのか。筆者は、自身もハルビン市出身朝鮮族としてのバックグラウンドをもち中国・韓国・日本の間で移動しながら生活をする「参与観察」を行い、それぞれの現場で朝鮮族の方々にインタビュー調査を行ってきた。具体的なインタビュー調査地は、延吉市、ハルビン市、北京市、ソウル特別市、東京首都圏である。

本書の構成は、朝鮮族の移動の地理的広がり即ちに即した形で展開している。すなわち、第1章で1949年からの中国朝鮮族としての歴史が刻み込まれている延辺朝鮮族自治州とハルビン市の民族学校で起こっている二言語教育をめぐる実態とその変容を紹介した後、第2・3章で、改革開放政策に伴って北京市への「国内移動」をした朝鮮族の実態を扱い、「国際移動」した事例として第4・5章で韓国、第6章で日本の実態を分析している。

ただし、この構成上の順序が歴史的流れに対応しているとは考えないほうがよい。むしろ、こ

これらの地理的な広がりの中で朝鮮族が直面している教育とアイデンティティをめぐる問題は、国境を跨いではいるが共振しているものとして捉えることを読者に要請している。それは、現代世界におけるグローバル化によって、近代国民国家体制の下でむすびつけられてきたナショナルな領土と文化の対応関係が崩壊してきている現実を反映した興味深い事例の水平的な展開となっているのだ（アパデュライ 1996 = 2004）。

本書では、現代の朝鮮族の人びとが生活している現場を描写しながら、そこで人びとが教育と言語とアイデンティティをめぐる、どのような意識をもっているのかを明らかにしようとしている。喩えるなら、音楽が、鳴り響くコンサートホールや聴衆との相互作用の中で、その姿を変えるように、朝鮮族の教育と言語をめぐる課題を生活現場との連関の中でこそ理解するべきだ、という筆者の想いが浮かび上がる構成だ。第2章で取り上げられている北京郊外・望京の「韓国城」というハイブリッド・コリアンタウンは、21世紀における東アジア文化がどのように変容していくのかを占うひとつの近未来像とみることができるだろう。「韓国城」の成り立ちと概要を本書に拠って簡潔に紹介しよう。

望京は、もともと畑や墓地がある北京郊外の村だった。しかし、1994年以降は中国政府の北京都市大開発計画の一環として、居住地と商業地が一体化した副都心としての開発が進んだ。その結果、グローバル企業が進出し、都市中間層の集まる高収入・高消費の街として知られるようになった。1999年からは海外留学経験のある中国人に帰国創業サポートをする専門機関としての「留学者創業園」を同区内に設立して、グローバル人材を受け入れて中国における科学技術産業への貢献を目指す動きを活発化させた。2003年に中国政府が外国人への居住制限を解除すると同時に、他の外国人専用マンションよりも賃貸価格が安かったことから韓国人入居者が急増し、2006年現在では約4万人の韓国人が居住している。ただし、同区には朝鮮族約7万人が居住しており、さらには北朝鮮政府の支援のもとに経営されている料理店があることに象徴されるように北朝鮮の人々も集住することで、韓国人・中国朝鮮族・北朝鮮の人々が国家による政治的な分断を乗り越えたコリアンタウンを形成しているのである（pp.84-92）。

マルチナショナルな人々が行き交う望京では、社会生活のあらゆる側面において、朝鮮族の人々が中国と韓国の間を媒介する役目を果たしている。中国進出韓国企業において、中国および中国人のことを知悉して中国語・韓国語でコミュニケーションのできる朝鮮族の人々の力が、ビジネス上の成功には不可欠だ。地域の住宅地において、中国人と韓国人の間での生活習慣の違いや言葉が通じないことによるトラブルへの対応にも朝鮮族の人々があたっている。韓国人家庭での家政婦のニーズも朝鮮族によって満たされている（pp.98-101）。そうした日常的な異文化接触の積み重ねは、そこに生活する人々が意識するかしないかに関わらず、確実にライフスタイルの変容を経験し、その人々の生活が総体として望京を独自のハイブリッド文化街にしているのだろう。

ところで、このコリアンタウンの存在感を高めている背景には、韓国の音楽アイドルやドラマなどのポピュラーカルチャー人気＝「韓流」ブームがある。韓国では1999年に「文化産業振興基本法」が制定され、政策的に国外市場向けのポピュラーカルチャー振興を進めてきているが、韓国ドラマは1990年代後半からアジアを中心に世界的な旋風を巻き起こし、日本でも2003年以降の「冬ソナ」ブームによって「韓流」は一定の地位を確立しているようにみられる。中国では韓国の音楽やファッションに代表される文化や言語習得に興味を持つ若い人々を「哈韓族」と呼んでいるが、「韓国城」は「哈韓族」にとって中国国内で韓国文化に触れることのできる「聖地」のような空間と捉えられているという（P.95）。また、中国人家庭の食卓にキムチが登場するようになった背景には、2003年に放映された韓国ドラマ「大長今」（日本語タイトル「宮廷女官チャ

ングムの誓い)」の大人気ぶりが影響しているのではないかという興味深い指摘もある (P.96)。

このような「韓流」ブームは、世界に「韓流」ポピュラーカルチャーを愛好する人々のコミュニティを創った。そのコミュニティは韓国という実際に存在する国家の領土を越えて存在している。そういう意味で、「韓流」のバーチャルな「領土」を成立させているということがきるかもしれない。愛好家の間には国境は存在せず、等しく「韓流」コミュニティの一員として認められることが、かれらの絆を強めるような「脱領土化」されたコミュニティの出現である。

また、望京のトランスナショナルなイメージ形成には、日本・日本人の存在も寄与しているという。商業区にあるイトーヨーカドー内に2011年には期間限定で「日本ラーメン横丁」が設けられ人気を呼んだことにみられるように、望京には日本人や日本の食文化に出会う機会があることが認知されている。

さらに、望京「韓国城」をめぐる興味深い現象として、インターネットを通じた活発な多言語での情報交換が行われていることによって、実際に「韓国城」を訪れる人々の流れが生み出されていると筆者は指摘している (pp.105-7)。情報源は対応するグループごとに大きく以下の4つに分類される。①中国人むけサイトの「望京網」。②韓国人むけ個人・商業ブログ。③朝鮮族むけ情報サイト。代表例として黒竜江新聞インターネット版。④日本人を含む外国人観光客によるブログ。「韓国城」は、このようなトランスナショナルなバーチャル・コミュニティによって、そのハイブリッドな性格を形成しているということもできるだろう。

以上でみてきたグローバル時代の移動が生み出している新しいハイブリッドな生活空間としての望京「韓国城」は、いわゆる伝統的なエスニックタウンとは違って、特定のエスニック集団メンバーに限られない多様な人々の関わりがその生活空間の成立に不可欠である。これに対してソウル九老区「ガリボンドン」は主に肉体単純労働に従事する朝鮮族男性が集住する「古典的」朝鮮族タウンにみえる。韓国的一般メディアでは、「ガリボンドン」を「延辺タウン」・「朝鮮族タウン」と呼び、韓国の主流社会とは相容れない「異文化空間」として捉える傾向がある (P.168-9)。

しかし、隣接する永登浦区の大林洞にも朝鮮族が集住しており、朝鮮族の巨額の投資による商業が発展しつつあり、2009年にはソウルで外国人が一番多く居住する地域となった (P.178)。街中には、中国語の看板があふれ、「朝鮮族の人びとは、周りの人びとの視線を特に意識せず、自分たちのまなりのある朝鮮語で話を交わしている」 (P.179)。朝鮮族の人びととその支援者である韓国人市民団体の人びとは、ガリボンドン一帯を「中国同胞タウン」と呼び、中国人・朝鮮族・韓国人が共につくる新たな地域社会としていこうとする意向がうかがえる (P.190)。

このようにエスニックタウンがハイブリッド化することは、特定のエスニック集団と言語・文化の結びつきが固定化されていたものから解放されることを促進する。それは、グローバル時代の必然的な流れといえるのかもしれない。従来は所属するエスニック集団において継承される言語を子どもにも習得させることは当然と考えられてきたが、そうした考えがグローバル時代には必ずしも合致しないから、子どもの将来のためにより有利な「文化資本」を身に付けさせるために、エスニックなつながりのない言語を習得することを自由に選択する時代に突入したということなのかもしれない。

つまり、言語習得の選択には、その人のエスニック集団への帰属意識だけでなく、時代や状況に即した社会上昇のための教育戦略が深く関連してくることになる。また、言語習得のための動機として、まさにグローバル時代に顕著になってきているのは、純粋に楽しむために言語習得を目指す若者が増加していることであろう。具体的にいうならば、好きなアニメや漫画を元々制作された言語で楽しみたい、アイドルがドラマや映画で使っている言語で楽しみたい等という希望などである。言語習得とエスニックなアイデンティティ意識がむすびつかない事例であり、生

活のための実利的な言語習得の希望とも異なる傾向である。そうした人々が「韓流」ブームによって確実に数を増やしているに違いない。

IV. 複数言語環境は「ハイブリッド・アイデンティティ」をもたらすのか

本書において「ハイブリッド・アイデンティティ」は、重要な鍵概念とされている。序章では、トルコ系ドイツ人の事例を分析した (Schumann, 2011) および (Smith, 2009) に拠りながら、「2つ以上の国やエスニック・グループあるいはそれとは異なる次元の複数の集団の文化を同時に有し、そうしたグループに帰属意識をもつ」「複数のアイデンティティを並列的に持つ段階から徐々にその境界が曖昧になり、併存するアイデンティティが融合して新しいアイデンティティを創造する過程にある」朝鮮族のありようを描くことを本書の目標に掲げている (pp.17-8)。

そうした朝鮮族の人びとへのインタビューが本書には多く引用されているが、その中でも特に印象的なのが、2011年に京都でインタビューに応じている自称「東北アジア人」の林さん (男性・50代前半・中国で学士号、日本で修士号・博士号取得・専門職) の事例である (pp.221-2)。林さんは、30代前半に日本に留学した後、仕事の海外出張の都合上、日本国籍を6年前に取得したという。堪能な語学能力を生かして、中国、韓国、北朝鮮、日本、ロシア、モンゴル等を縦横に駆けめぐることによって、「東北アジア人」というアイデンティティがしっかりと腑に落ちるようになったのだそうだ。

これは、まさに高学歴中国朝鮮族が自らの将来像として掲げたマニフェストとして評者は理解した。国民や民族としての所属先によるアイデンティティにこだわると、中国朝鮮族の人々は中国・韓国・北朝鮮の間で引き裂かれる。さらに、中国で濃密な関係性を半世紀以上にわたって形成してきたエスニック集団としてのアイデンティティや誇りは、集団外では不当に低く評価されることもあるし、逆に高く評価されることもある。どちらにしても振れ幅が大きく、非常に不安定な社会的地位に置かれる存在だ。そのことを逆手にとると、朝鮮族は移動を選択することになるのだろう。高学歴朝鮮族であれば、なおさらのこと、現代世界での移動のチャンスは多い。中国・韓国・北朝鮮以外の地域と那些人々との間での交流も経験した末に行き着いた先が、「東北アジア人としての私」という認識だという。

「東北アジア人」というマニフェストに触れて、評者が連想したのは、メキシコで1920年代に文部大臣を務めたバスコンセロス (José Vasconcelos) による「宇宙人種 (Raza cósmica)」論である。「宇宙人種」とは、ラテンアメリカにおける未来の人種像である。ラテンアメリカにはもともとユーラシア大陸から移動してきた先住民がいたが、15世紀以降ヨーロッパ人による植民地化を経験する中で、強制的に連行された多くのアフリカ人も加わり混血化が進んだ。19世紀にヨーロッパからの政治的独立を遂げた後には、世界の様々な地域からの移民が流入する最もダイナミックな地域となった。つまり、ラテンアメリカは世界中に存在する人種が混ざり合うフロンティアであり、そこで生まれる「混血人種」こそが、ラテンアメリカを象徴する「宇宙人種」として、世界の未来を席捲するという希望を込めたマニフェストである (青木1995)。

「宇宙人種」論は、メキシコにとどまらずラテンアメリカ知識人に大きなインパクトをもって受け止められ、その後もラテンアメリカが目指すべきユートピアの未来像として言及されることが少なくない。つまり、逆説的に「宇宙人種」は見果てぬ夢のようなものとして認識されているとも言えよう。「東北アジア人」というマニフェストは、そのようなハイブリッドな文化的アイデンティティの夢を共有しているように評者にはみえる。

そして、夢や理想には現実が影を落とすのが理という。本当のところ、高学歴中国朝鮮族の下に生まれた子どもは、恵まれた多言語教育環境のもとで育つことで、多言語を自在に操ることのできるハイブリッド・アイデンティティをもつ「東北アジア人」になれるのだろうか。本書の趣旨は、そもそもこのような疑問に答える性質のものではない。親の立場から自身の多言語能力と将来へのビジョンを基にした子どもへの教育方針を移動の経験との関わりにおいて語ってもらいインタビュー調査がデータとなっているからだ²。

評者は、日本における1990年の出入国管理法改定以降、急増した在日ペルー・ブラジル人をめぐる教育問題について、日本およびペルー・ブラジルにおいて、移動を経験している子どもとその親や教育関係者を対象にして社会学的視点からの調査・研究を行っている（Yamawaki2003, 山脇2005, 2009, 2010）。そうした調査では、複数言語の習得に関する優先順位と将来のビジョンを巡る親子間または夫婦間での葛藤に直面することが少なくなかった。さらには、家庭教育と学校教育の間での齟齬、異なる教育施策をもつ国の間を移動することによる方針の齟齬などが重なることもあり、複数言語環境が子どもにもたらす試練の大きさは、どの言語においても十分に社会的生活を送るのに支障のないコミュニケーション能力を発達させることができている「ダブルリミテッド」の子どもの問題となって顕現しているのを目の当たりにした。

「ダブルリミテッド」または「一時的セミリング現象」と呼ばれる言語能力習得の問題に関しては、日本の外国人集住地域（例えば、愛知県豊橋市や静岡県浜松市など）の教育現場関係者の間では認知されるようになってきた。しかし、大人と違って子どもは複数言語環境におかれたら「自然に」複数言語を身に付けることができるという「素朴な」思い込みによって適切なサポートを受けられなかった子どもに関する学術的な実態調査は始まったばかりといえよう（中島2007）。そもそも日本では外国籍の子どもは義務教育の適用範囲外として位置づけられていることも問題を捉え難くしている³。本書でも取り上げられているように、言語の獲得過程は決して自然に行われるものではなく、多くの人びとの思惑や戦略の中で選択的に行われているものとして意識されるべきであろう。そうした意味で、大人は子どもの言語獲得に大きな重い責任を負っている。

関連する問題として、言語とアイデンティティをテーマとしている本書において、さらに議論を掘り下げるために取り上げられてしかるべきだったのではないと思われるのは、言語に対してどのような認識をもって向かい合うのか、という問題である。人びとが母語環境を離れて交流する機会が増大するグローバル時代において、多言語運用能力を経済活動のための手段＝スキルとして身につけることを奨励する風潮が世界に蔓延している。日本も例外ではないが、中国ではその様相がより端的に表出しているように思われる。本書に引用されているインタビュー・データからも読み取れる傾向である。

言語をそのようなスキルとして扱うことを全面的に批判するつもりはないが、それは言語によって広がる世界の彩を拒絶しているように思えてならない⁴。言語をあくまでもスキルとして扱

² 家族を対象にした質的調査の金字塔として、家族メンバーによっていかに異なる認識・世界観をもっていいのかを詳細なフィールドワークによって「羅生門的方式」の文学的記述を使って明らかにした文化人類学の古典＝アメリカの人類学者であるオスカー・ルイスの業績がある（ルイス1959＝2003, 1961＝1986, 1966＝1970・71）。『貧困の文化』・『サンチェスの子どもたち』はメキシコの家族を扱い、『ラ・ビーダ』はプエルト・リコとニューヨークの間で展開する家族のありようを、ひとりひとりの家族メンバーの心のひだにも入り込んだ記述によって描き上げている。本書のテーマに関しても、このような手法によってさらに掘り下げることができるのではないかという印象を評者はもっている。

³ 日本における外国籍の子どもの教育をめぐる諸問題の詳細に関しては、（佐久間2011）、（志水ほか編著2013）、（宮島2014）などで現状について考察されているので参照されたい。

⁴ 異なる複数言語の接触が世界に彩を与えている様子を鮮やかな分析によって表現しているエッセイとし

うと、母語とは異なる言語運用能力が異文化間対話を促す方向に働くのではなく、かえって自文化に引きこもるために多言語運用能力が活用されるという事態が引き起されるのではないだろうか。

もっとも、そのような言語とのつきあい方を選択することも故なきこととは言えない。実際のところ、それぞれの言語がそれを使用する人びとに要求する世界観は異なり、言語の論理が人びとのものの考え方を規定してしまう側面があることは、これまでの言語学研究が明らかにしてきたことである。複数言語使用者は、複数の言語の論理に引き裂かれる存在であり、ひとり的人格に収まりきれない矛盾に生きることに耐えられなくなる事態を避けることは、健全かつ賢明な判断と言えなくもない。

ただし、そのような「賢明な」言語に対する向き合い方に基づいて、複数言語を使ってコミュニケーションをとっているからと言って、「ハイブリッド・アイデンティティ」が形成されることにならないことは確かだろう。

V. おわりに

本書は、高学歴中国朝鮮族の人びとに焦点をあてて、グローバリゼーションが私たちの生活にもたらす身近な影響を、中国・韓国・日本におけるフィールドワークに基づいて、複数言語の学習・使用と教育戦略という観点から描き出した労作である。アジアの近未来像を考える上で、言語と教育への目配りは欠かせないし、それを「人の移動」というダイナミズムと関わらせる発想も非常に重要である。本書は著者自身の多言語運用能力をフルに生かして、東北アジアの社会変動の最前線を調査した成果と言えよう。20世紀末から始まった中国朝鮮族の大移動時代は、私たちが経験しているグローバリゼーションの性質を反映したものであり、日本をその生活の場のひとつとして中国朝鮮族の行方に注目することは、内向きになりがちな昨今の日本人の視野を広げてくれる貴重な機会になると評者は確信する。

しかし、本書が2013年度に東京大学大学院教育学研究科比較教育社会学コースに提出された博士学位申請論文をもとに執筆されている事情もあるだろうが、本書のタイトルは本書の学術的価値を担保している興味深いテーマ群に対応していると言えるのか、という点では疑問がぬぐいきれない。そうした意味で、著者がこれからの自由な立場で行うであろう研究に対して、大いに期待したいと思う。

参考文献

- 青木利夫 1995年「メキシコにおける『混血』イメージ—ホセ・バスコンセロスの『混血』思想」
上智大学イベロアメリカ研究所『イベロアメリカ研究』第16巻第2号：61-74.
アパデュライ、アルジュン1996 = 2004年『さまよえる近代—グローバル化の文化研究』（門脇健一訳）東京：平凡社。
アーリ、ジョン 2000 = 2006年『社会を越える社会学』（吉原直樹監訳）東京：法政大学出版会。

て（多和田2003→2012）がある。多和田葉子はドイツ語と日本語で優れた文学作品を発表し続けている特異な現代日本人作家であるが、彼女の言語に対する深い洞察は、私たちに言語に対する向きあい方を深慮する契機を与えてくれる。

- Council of Europe 2001-2002 Common European Framework of Reference for Language: Learning, Teaching, Assessment (CEFR).
- 2002-2003 Guide for the development of language education.
- 2007a From linguistic diversity to plurilingual education : Guide for the development of language education policies in Europe (Executive version).
- 2007b 同上 (Main version).
- OECD (経済協力開発機構) 編著 2006 = 2007年『移民の子どもと学力—社会的背景が学習にどんな影響を与えるのか』(齊藤里美監訳) 東京: 明石書店.
- 佐久間孝正 2011年『外国人の子どもの教育問題』東京: 勁草書房.
- 志水宏吉ほか編著 2013年『「往還する人々」の教育戦略』東京: 明石書店.
- 多和田葉子 2003→2012年『エクソフォニー』東京: 岩波書店.
- 中島知子 2007年「テーマ『ダブルリミテッド・一時的セミリンガル現象を考える』について」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』3: 1-6.
- 本田弘之 2012年『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』東京: ひつじ書房.
- 宮島喬 2014年『外国人の子どもの教育』東京: 東京大学出版会.
- ルイス, オスカー 1959 = 2003年『貧困の文化』(高山智博ほか訳) 東京: 筑摩書房.
- 1961 = 1986年『サンチェスの子供たち』(行方昭夫・上島健吉訳) 東京: みすず書房.
- 1966 = 1970・71年『ラ・ビーダ』(柴田稔彦・行方昭夫訳) 東京: みすず書房.
- Yamawaki, Chikako 2003 “El ”Problema de la Educacion” desde el punto de los migrantes-Las experiencias de los peruanos en Japon”, *Emigración Latinoamericana: Comparación interregional entre America del Norte, Europa y Japón*, JCAS(National Museum of Ethnology) Osaka, Japan: pp.455-472.
- 山脇千賀子 2005年「日本の学校とエスニック学校—はざまにおかれた子どもたち」宮島喬・太田晴雄編『外国人の子どもと日本の教育—不就学問題と多文化共生の課題』東京: 東京大学出版会: 97-115
- 2009年「グローバル時代に求められる国際教育に関する—考察—日本とペルーのはざまに生きる青少年の事例に学ぶ—」佐久間孝正(研究代表) 科研費報告書『外国人児童・生徒の教育施策と自治体間格差の比較研究』: 85-98.
- 2010年「移民経験はどのように人生を変えるのか—日本での就労にともなう家族の変容—」宮島喬(研究代表)「滞日外国人における家族危機と子どもの社会化に及ぼす影響の社会学的研究」: 31-43.